

# 強者の戦略

大学入試において出題される英文の大半は、入試問題のために書き下ろされたものではなく、公刊された書籍やウェブ記事から引用されたものです。大学入試センター試験のように出題する長文（特に筆記の第5・6問）を独自に書き下ろすケースもありますが、対話文などを除くと、毎年書き下ろしの長文を用意してくる大学は殆ど見当たりません。

もちろん、英文を書き下ろしていないこと自体に何か問題があるわけではありません。私も研伸館で使用するために英語長文を書き下ろしたことがあります。高校生の力を適切に測れる程度の難易度で、しかも彼らの興味を引けそうな内容を英語で書くという作業は極めて骨が折れます。ましてや大学入試は受験生の一生を左右しかねないものです。そのために英文を書き下ろすとなると、執筆者が大学教員であるとしても、大学入試センターが取っているようなサポート体制を取らない限り難しいでしょう。

そもそも、書き下ろしの英文を使用することが最善であるとは限りません。大学というアカデミアで飛び交う「学術言語」としての英語にどの程度通じているかを問うなら、現代英語から語彙や文法が乖離しすぎない範囲の古典（たとえば **Bertrand Russell** など）や実際の学術論文や記事から出題するのはむしろ自然なことだと思います。ただし、当然のことながら、引用元の執筆者は日本の大学受験生のことを一切配慮していません。

だから、各大学の作問担当者は、ある英文を入試問題として採用するに当たり、各大学が要求する学力水準に応じて原文に手を加えることがあります。強者を志すあなたが挑むにふさわしい大学——東京大学や京都大学など——も例外ではありません。むしろ、トップレベルの大学になればなるほど原文に手を加えていると言っても良いかもしれません。手を加えると言っても、難解な語をより平易な語に置き換えたり、原文のある範囲を要約したり、英文の一部を（すごいときはパラグラフを丸ごと！）削除したり、程度は様々です。

そのこと自体に異論を唱えることは、本稿の目的ではありません。

ですが、著者ならざる人の手が加えられた文章にはある種の「違和感」が生まれてしまうものです。ましてやパラグラフ単位の改変が行われている場合、たとえば「長文は文脈把握が大切である」という考えを頑なに信じている受験生は迷子になってしまうかもしれません。あつたはずのパラグラフが欠けていれば、厳密な意味での文脈把握など不可能なのですから。一方、大学が原文を改変した意図を探ることで、それぞれの大学が考える「受験生に求める語彙レベル」を推測することができるかもしれません。

今回の「強者への道」では、東京大学、京都大学、大阪大学が出題した英文を原典と比較することで見えてくることをお伝えしてゆきます。入試問題の解法をお伝えするわけではないので直接的な実利に乏しい連載になると思いますが、市販の解説書のレベルに飽き足らない人に刺さることを目的にしたいと思います。

# 強者の戦略

今回は、東京大学の英語についてです。

東京大学は、英語の試験で出題した文章の原典情報を公表していません。そのため、原典情報については私の推測の域を出ないことを予めご承知置きください。

2019年度の第1問(A)は、2017年に公刊された *Children's Rights and Social Work* の第2章が基になっていると考えられます。証左として、第3パラグラフの冒頭と該当部分を比較してみましょう。

Another change in this period was the protection of children from parental abuse and neglect, which were subjected to intense scrutiny and challenged increasingly by government authorities. In 1889, both France and Great Britain passed laws against cruelty to children, including that caused by their parents.

2019 東京大学入学者選抜試験 英語第1問(A)第3パラグラフ1・2文目

Another change in this period is the protection of children from abuse and neglect by their parents. Parental neglect and abuse were subjected to intense scrutiny and challenged not only by private philanthropies, but increasingly by government authorities. The state also increasingly challenged parental authority and autonomy in child rearing. In 1889 both France and Great Britain passed laws against child endangerment, including that caused by their parents (Alaimo 2002).

Hanita Kosher, Asher Ben-Arieh, Yael Hendelsman (2017), *Children's Rights and Social Work*, Springer, p.11

一見して明らかなのは、出題された文章は原文に比べてかなりシェイプアップされているということです。1文目は「abuse and neglect by their parents」が「parental abuse and neglect」に、それに続く「Parental neglect and abuse were ...」の2文は「, which were subjected to ...」と関係詞節に書き換えられ、1文目に統合されています。最後の1文は、「child endangerment」が「cruelty to children」に書き換えられ、別の著者の見解の引用であることを示す「Alaimo 2002」の表記も外されています。

原文の変更は入試問題作成に当たってどこまで許されるのかは分かりかねますが、東京大学側の意図は「語数を圧縮すること」「語彙レベルを上げすぎないこと」にあったのではないかと思います。特に「endangerment」は『ジーニアス英和辞典第5版』『ウィズダム英和辞典第3版』『オーレックス英和辞典第2版』のいずれも難単語扱いになっていて、「cruelty」に置き換えることで高校必修相当レベル（ウィズダム英和辞典第3版に基づく）に抑えたのではないかと思います。このような分析を進めてゆくと、東京大学は出題する英文の語彙レベルについて特に配慮していることが窺い知れます。難単語を貪欲に追い求めてゆくことを否定するつもりはありませんが、英和辞典に示されている重要度表記（「\*\*\*」や「\*」など）にも意識を向けて、高校生～大学生レベルまでの語彙（辞書によって異なりますが7,000～8,000語程度）を漏れなくカバーするよう心がけてはどうでしょうか。英和辞典を引く営みはたいの英語学習で必要になる

# 強者の戦略

と思いますので、習慣化することで効率アップが図れると思います。

また、これは自身で特定するのは現実的ではないかもしれませんが、大幅に書き換えられた部分（第1問(A)なら第3パラグラフ1文目の後半）がスムーズに読めるかどうかは確認しておきたいですね。その部分に関しては「これなら読めるだろう」と大学側が判断しているはずですから。

もう1つ、第5問の小説における書き換えを確認しておきましょう。原典は Jon Mooallem の *The Amateur Cloud Society That (Sort of) Rattled the Scientific Community* だと思われます。

Gavin Pretor-Pinney decided to take a break. It was the summer of 2003, and for the last 10 years, in addition to his graphic-design business in London, he and a friend had been running a magazine called *The Idler*. This title suggests “literature for the lazy.” It argues against busyness and careerism and for the value of aimlessness, of letting the imagination quietly run free.

2019 東京大学入学選抜試験 英語第5問 第1パラグラフ

GAVIN PRETOR-PINNEY DECIDED to take a sabbatical. It was the summer of 2003, and for the last 10 years, as a sideline to his graphic-design business in London, he and a friend had been running a magazine called *The Idler*. *The Idler* was devoted to the “literature for loafers.” It argued against busyness and careerism and for the ineffable value of aimlessness, of letting the imagination quietly coast.

Hope Jahren, Tim Folger (2017), *The Best American Science and Nature Writing 2017*, Houghton Mifflin Harcourt, p.271

両者を比較してみると、大学側が随所で改変を行っていることが分かります。たとえば「sabbatical」が「break」に、「as a sideline to」が「in addition to」に、「loafer」が「the lazy」に、「coast」が「run free」に、それぞれ書き換えられています。これらはいずれも語彙レベルを抑えるための措置と推測できます（お手持ちの英和辞典で難易度がどのように変わっているかを確認してみてください）。一方、「was devoted to」を「suggests」に、「It argued against ...」を「It argues against」に書き換えるなど、過去形が現在形に変更されています。これが意図的なのか原典の違いなのかについては追求する術がないため、ここでは踏み込みません。いずれにせよ、原典と照らし合わせることで初めて見えてくることがあることはお分かりいただけるのではないかと思います。

もちろん、こういった分析を行うことが受験生に求められているわけではないでしょう。ですが、語彙レベルに関する大学側からのメッセージまで無視するのは勿体無いと思いませんか？ そして、入試問題を分析して受け取るべきメッセージを見極めて、教室でお伝えするのが私の仕事です。

それでは、今回はこの辺で。次回は京都大学の英語を見てみましょう。